

江戸遊学

信州一円の紺屋を巡る旅から戻って間もない安政五年（一八五八）の十二月、栄一（十九歳）は、尾高家の三女で新五郎（惇忠）や長七郎の妹である千代（十八歳）と結婚します。

残された写真を見ますと、いかにも「手弱女」という表現がふさわしいような美しく気品のある千代の容姿ですが、しっかりとした気性の持ち主で、荒々しい農作業にも他人に後れを取るようなことはなかったと伝えられています。

嫁も迎え、さらに家業に精を出さなければならぬ栄一ですが、激動する時代の中で、「一農民として安閑としてはられない、江戸へ出て学問をしたい、という思いが募るばかりでした。

すでに尾高家では、長男として



▶千代夫人（渋沢栄一史料館提供）
留守がちな栄一に代わり、けなげに家を守る千代を気遣い、栄一はたびたび愛情あふれる手紙を送っています。

家業を切り盛りしなければならぬ新五郎に代わり、長七郎が早くから江戸へ出て、下谷練堀小路の海保塾で漢学を、神田和泉橋の伊庭道場で剣術を学びながら、広く諸方の志士と交わりを深めていました。

長七郎の主な交友には、多賀谷勇（長州藩・原市之進）（水戸藩・菊池教中）（宇都宮藩・大橋訥庵）（江



「第4回」

戸の儒者）、下野国の一連の人々である河野巖三（医者）・小島強介（商人）・小山朝弘（医者）・横田東四郎（商人）・川連虎一郎（大庄屋）などがいます。栄一の談話によれば、当時の長七郎は、日本で一二の剣名をうたわれたといえます。

栄一のたつての願いに、とうとう父親も折れ、春先の農閑期に限り、これを許すということになりました。文久元年（一八六二）の春、念願の江戸行きがかなったのです。栄一は、海保塾に寄宿しながら漢学を、神田お玉が池の千葉道場では剣術を学びます。栄一もまた、時代の風が吹く江戸の地に立つことになったのです。

（文：新井慎一）

物語の手引き

『尾高新五郎（惇忠）』
1830年下手計村生まれ。栄一とはいとこ関係に当たり、栄一の雅号「青淵」の名付け親でもあります。

忌名名（実名）は惇忠、通称を新五郎、藍番と号しました。

栄一の学問の師であり、栄一は少年時代新五郎の元に通い、論語などを学びました。また、栄一の思想や人格形成にも大きな影響を与えています。

そのことから、後の人々は、「藍香ありてこそ、青淵あり」とたたえています。

実業家としても、栄一がその設立に大きくかかわった『富岡製糸場』の初代場長や第一国立銀行仙台支店支配人などを歴任しています。

キラリ熱・中・時・間

～花のプリンス倶楽部～



清水幹央 部長

子どもたちの未来を育てる

市内農産物をテーマとしたイベント会場で、ピンクにそろえた衣装をまとい、華やかに花の魅力を発信している団体がいます。

若手の鉢花生産者団体『花のプリンス倶楽部（以下花プリ）』です。花プリは、若い世代の花離れという問題に対し、「キッズガーデンニング教室」などを通して「花育」を実践しています。

花育は、子どもがのこから花を育て、親しむことにより、優しさなどを養おうとする取り組みです。これまで開催したキッズガーデンニング教室は14回。1,300人を超える参加者が、花とのふれあいを楽しみました。

花プリの発足は平成20年。「鉢花生産地としての深谷をもっとPRしたい」という思いの下、40歳以下の鉢花生産者14人でスタートしました。キッズガーデンニング教室のほか、小学校へ出向いての「花の寄せ植え教室」・母の日・敬老の日などにちなんだ「花力」



▲各種イベント会場で開催する『キッズガーデンニング教室』はいつも大盛況！

の作製」など、市民の生活に花の潤いを取り入れる活動を行っています。生産者として、鉢花の消費拡大といった効果は未知数である中で、子どもたちからのお礼の手紙や、「またやりたい」「大切にします」という言葉に、力をもらっているそうです。

部長の清水さんは、「今後、この活動をもっと広く知ってもらって、たくさんのかたと協力しながら、花の楽しみ方を伝えていきたい。特に、子どもたちには、花との良い思い出をつくってほしい。」と語ってくれました。

ありがとうの手紙



優秀賞
一般の部
母の手へ



田中 大澤誠一さん

私には、小さいころから父がなく、母親一人に育てられた。小学校の頃のある授業参観の日、母の手は少し泥がついて汚れていた。「いやだなあ」と思った。今思えば、母はたった一人で農業をして、四人もの子どもを育てるのだから、苦労は並大抵ではなかったろう。

私が教員になったころもその手はごつく、うす汚れていた。その手のおかげで私は大きくなった。がんばれるのだと思う。

今は、亡き母のその手に「ありがとう」と思う。

夫婦道のススメ

陽だまりの散歩道



高野 治和さん（80歳）
多喜子さん（78歳）

石塚にお住まいの高野さんご夫妻は、結婚56年目。治和さんは、教師生活一筋40年。忙しい夫を、農家を営みながら多喜子さんが支えてきました。退職後、治和さんは足を悪くされましたが、天気の良い日は、多喜子さんの押す車いすで、仲良く散歩に出掛けます。3世代7人のご家族は、そんなお二人についても温かく包まれています。夫婦円満の秘訣は、家庭でも、ホウ・レン・ソウを怠らず、何でも一緒に決めることだそうです。

※本コーナーの全編を通じて、登場する人物については、歴史上の人物としてその敬称を略します。また、年齢については、当時の通例に従い数え年の表記とします。